

令和 5 年度 第 1 回 静岡県文化政策審議会 会議録

日 時	令和 5 年 7 月 18 日（火）13 時 30 分から 15 時 40 分まで		
場 所	静岡県庁別館 9 階特別第二会議室		
出席者 職・氏名	会 長 横山 俊夫 （静岡県文化芸術大学学長） 副会長 太下 義之 （同志社大学経済学部経済学科教授） 委 員 北川フラム （アートディレクター）※Web 出席 木下 直之 （静岡県立美術館館長） 澤田 澄子 （公益社団法人企業メセナ協議会常務理事兼事務局長） 柴田 英杞 （独立行政法人日本芸術文化振興会プログラムディレクター） 鈴木壽美子 （静岡県文化協会会長） 遠山 敦子 （静岡県富士山世界遺産センター館長） 仲道 郁代 （ピアニスト）※Web 出席 松井 冬子 （日本画家） 宮城 聰 （公益財団法人静岡県舞台芸術センター芸術総監督） 森谷 明子 （日本画家） 諸田 玲子 （作家）		
	静岡県 スポーツ・文化観光部長 静岡県理事（東アジア文化都市担当） スポーツ・文化観光部部長代理 スポーツ・文化観光部 文化局長 （事務局） ” 文化政策課長		村松 毅彦 渋谷 浩史 都築 直哉 横山 雅機 小澤 和久
議 題	下記のとおり		
配付資料	別添資料のとおり		

1 議 題

- ・ 東アジア文化都市 2023 静岡県について
- ・ 第 5 期静岡県文化振興基本計画の進捗状況について

2 審議内容

別紙のとおり

(別紙)

1 結果概要

議題について、資料に基づき事務局から報告、委員から多様な意見が出された。

2 部長挨拶

第5期文化振興基本計画は昨年4月に計画がスタートしたが、通常の事業に加え今年1月から12月にかけて、東アジア文化都市の事業も展開している。これからの10年先、20年先の本県の文化の姿を視野に入れて、どのような政策展開をしていったらいいのかを大局的・長期的視点から、また各委員がお持ちの知見によってご提言をいただきたい。

3 議事

○横山会長 それでは早速、東アジア文化都市2023静岡県について事務局からのご報告を願う。

○事務局 文化振興基本計画とは別に、文化振興に大きく影響する施策として東アジア文化都市があり、今の文化政策の進捗に大きな影響を与えている。更にはクレマチスの丘の譲渡問題も現在行政的・政治的に調整をしており、実現すれば東部の文化芸術の拠点となる。こうした外的要因が動いている中で、東アジア文化都市について丁寧に説明したい。第5期文化振興基本計画が始まった令和4年6月に文化庁から東アジア文化都市の話があり知事以下幹部で熟慮したところ、2023年が富士山世界遺産登録の10周年にあたる年で、更に国際オペラコンクール開催年だったということ、そして、東アジアとの空港路線や、浙江省や忠清南道との地域外交の実績もあり、それを活かしながら、更にはアフターコロナの復興の先手を打つという点でも、東アジア文化都市を受けることは非常に静岡県にとってプラスになると考え、昨年8月に文部科学大臣から認定を受けたところである。お手元のパンフレット1ページ目の知事が大臣から認定をいただいている写真のとおり準備が始まり、2023年1月から東アジア文化都市となった。

制度の全体については、まず資料1の2に事業構造という説明があり、上から四つの階層に分かれている。これを更に細かく説明したものがカラーの富士山の形をした資料で、これが予算が入っている全体構造になる。東アジア文化都市事業は4階層に分かれており、一番上が交流発信事業で、先般5月2日に行った春の式典や、事務局運営費等を含め、国庫金の1億円補助を財源として、2億円の予算で1階層目で展開している。2階層

目はコア事業という階層で、文化振興基本計画に載っている文化芸術基本法が定める文化芸術事業、国際オペラコンクールや富士山世界遺産、伊豆文学祭等々の事業として、7億6,000万円を予算化している。更にはその下の3階層目に協働プログラムがあり、東アジア文化都市として文化を広く捉え、県主催の幅広い分野で展開する事業を協働プログラムという形にし、更に協働プログラムの中に新規事業の部分の9,000万円予算を用意している。一番下の階層は県以外が行う事業として、市町や民間が行う事業を4階層目とし、この4階層目には市町助成という形で1市町500万円ずつの助成が付いており、1億7,500万円の予算。更に今も募集中の民間助成事業は、1件最大50万円の助成の事業が100本分ぐらい、3,800万円の予算も付いている。また、お金は付かないが、市町・民間が展開する文化事業を全て、このプラットフォームに載せてしまおうということで、認証制度を4階層目に持っている。最終的には事業本数が500本以上、経済効果が100億以上、来場者360万人を目指し、全て過去の9都市の最大数値を超える数字を目標としている。

令和5年度に入り、2階層目のコア事業以下の事業が一気に展開し、今の事業総本数では、認証事業が本日現在で600件になっている。事業本数の目標である500本を優に超えており、かなりいいペースで進んでいる。

東アジア文化都市のスケジュールとしては、パンフレットの中にもあるよう、9月から11月の秋がコア期間で、年の後ろの方に重心を掛けている。この期間に一気に事業を展開し、数百の事業が集中する形になっており、更に盛り上がっていくと思っている。

ここで東アジア文化都市と文化振興基本計画の関係について、若干お話すると、東アジア文化都市はコア事業としての文化芸術をメインにしており、文化局が主催している。SPACを広報アンバサダーとして、SPACの知名度もアップさせたり、この文化振興基本計画を大きく振興させるという点で進めている。

多方面に手広く文化を捉えているということが大きな特徴になっており、文化芸術基本法の8条から13条で個別のものが定まっているが、その文化芸術の範囲を大きく超えている。静岡県の生活文化の魅力は、コアな文化芸術に限らず、文化芸術基本法の範囲内でも文化芸術のコアとは別に定められている茶道だとか食文化も突出していると思う。更にはもう少し広げたものが、スポーツであり、サッカー・ラグビーの両ワールドカップ。そしてオリンピック・パラリンピックを開催した県でもあるので、そこが聖地となり、スポーツ文化が華やかに展開されている。更に、静岡で特徴的な、プラモデルのホビーショーなどもその中に入れ、工芸分野や輸送機器、自動車・オートバイの産業や、浜松等の楽器の産業も大きな特徴があり、産業だけでも文化を語りきれないということ

で、そこが3階層目以下の文化局以外の主催事業としてスポーツや産業文化を取り込んで、観光振興も意識して設計をしたものである。もう一枚、東アジア文化都市のマークとSDGsのマークが入っている資料を用意したが、ロゴマークの意味や東アジア文化都市の理念を掲げている。東アジア文化都市のブランドは、文化交流だけではなくて、世界の共生と平和の希求、ローカル外交、アフターコロナの交流の復活を理念として掲げ、持続可能な都市づくりを理念として進めている。これは東アジア文化都市が模倣した欧州文化首都制度の趣旨でもあり、これまでの京都・奈良・金沢といった先行の指定都市は、文化芸術に特化し展開していたが、文化を広く捉えたという点では、静岡県は、欧州文化首都の趣旨を踏まえた、新しい形の東アジア文化都市を目指している。文化振興基本計画もコアとしながら進めてきた。

来年度以降、東アジア文化都市のレガシーを意識して、県の文化政策を進めていくことになる。更には県庁全庁が東アジア文化都市のレガシーを意識して動いていく。文化振興基本計画の考え方の間口を広げ、例えば文化財保護法が観光振興との連携を進めたり、地域振興やスポーツ振興、更には産業振興とも連携を考えたり、次期計画ではそうした意識での検討も視野に入れていかなければならないと考えている。このように第5期計画が始まった途端に新たに湧いてきた東アジア文化都市の考え方を前提としてご承知いただければと思う。

○**横山会長** 審議会がかねがね議論してきた文化というものの捉え方を、平和構築のための一つの観念として打ち出そうとするというお話であった。文化政策審議会が立てた県の文化振興基本計画そのものは、どういう形に向かおうとしているか説明願う。

○**事務局** 第5期静岡県文化振興基本計画の進捗状況について説明する。資料2で説明をする。シート2であるが、平成18年に静岡県の文化振興基本条例が施行され、その条例の下、3年から4年を計画期間とした計画を策定して、静岡県では文化振興の施策を展開している。今年第5期の計画期間の2年目ということになり、計画期間が始まった令和4年度に静岡県が東アジア文化都市に選ばれたため、文化関係の事業については飛躍的に増大している状況である。続いてシート3だが、東アジア文化都市の関係である。シート4は、令和4年度の主な事業であり、上段に計画期間中の事業を掲載している。計画1年目ということで、昨年7月にふじのくに子ども芸術大学が、コロナが明けて3年ぶりの開催となった。アーツカウンシルについては2年目に入り、12月、1月には、風流踊が本県から二つユネスコの無形文化遺産に登録され、また、しずおか遺産という

制度を設置したところである。下段は、東アジア文化都市の関係で、特に年度の後半から準備が進んでいった状況である。

シート 5、文化振興基本計画について、第 5 期計画では五つの柱を設定している。シート 6 は、重点施策の 1「世界に輝く静岡の文化芸術の振興」ということで、こちらについては静岡県が持っている優れた文化資源を軸に事業を展開していくということで、例えば SPAC を中心とした演劇の都の推進や、ガストロノミーツーリズムを展開している。中段では、しずおか遺産制度を設け、本県の持つ文化財を、魅力ある歴史文化資源として磨き上げて、観光利用につなげていく取り組みを進めている。令和 4 年度は、遺産 3 件を認定した。また、今年は第 9 回静岡国際オペラコンクールがあり、271 人の応募者のうち予備審査を経て 76 人が通過し、10 月 28 日からの第 1 次審査に臨んでいくという状況である。

シート 7 は、重点施策の 2「社会の多様な担い手による創造的な活動の推進」で、多くの県民の皆様の文化活動にかかわる人を増やしていくということで対応している。ふじのくに芸術祭及び障害者芸術祭は、通年型の総合芸術祭として、同時期・同会場で開催し、一体的開催を進めている。今後は更に一体化が進むような取り組みを進めていきたい。設立 2 年目となったアーツカウンシルしずおかは、全ての県民を創り手とする取り組みに向けて、各地でのアートプロジェクトを盛り上げるために、住民プロデューサーを支える取り組み 31 件を昨年支援している。そして、住民プロデューサーの発掘という目的で、マイクロアートワークショップを展開しており、このような取り組みが他県から注目を浴びている。

シート 8 は、重点施策の 3「文化芸術に触れる機会の拡充と人材育成の促進」で、本県の次代の文化芸術を担う人材を育成していくということで展開している。ふじのくに文化教育プログラムでは、上段のふじのくに子ども芸術大学は、去年は 3 年ぶりに完全開催し、29 講座、655 人が受講し、かなりニーズが高く応募も非常に多かった。下段では、子ども向けの事業を全て一つのプログラムとして体系付けるということで、ふじのくに文化教育プログラムという冊子を昨年度取りまとめ、各学校へ配布をしたところ、好評を得ている。右側、SPAC の演劇アカデミーは令和 4 年度は 2 年目の取り組みとなり、非常に好評で、舞台芸術の人材育成の観点でに熱心な取り組みを宮城監督はじめ皆様に進めていただいている。

シート 9 は、重点施策の 4「文化芸術を振興する仕組みの充実」で、こちらはアーツカウンシルしずおかの設置を踏まえ、社会の他分野との連携、文化芸術と他分野の連携を図っていく体制や仕組みの構築を目指すものである。左側にあるせかいの劇場、ミニミ

ミュージアムであとろんについては、舞台芸術公園の観光利活用の観点で、4月にオープンした。この分野については、福祉、あるいは産業などとの連携を進めていく必要があり、東アジア文化都市の事業を進めることで様々なかかわりが出始めており、そのような点をつなげていくことが今後大事であると考えている。

シート 10 の重点施策の 5「持続可能な文化活動の推進」は、コロナ禍において明らかになった課題があり、文化芸術の活動、あるいは鑑賞方法の多様化がなかなか手当てされていなかったので、いかなる事態が生じても持続可能な文化活動のあり方を模索していくことが必要だということで進めている。右側の県立美術館では、デジタルアーカイブ、デジタルコンテンツの拡充を進めている。左側、ふじのくに障害者芸術ポータルサイト、ふぁいんダーは 3 月に開設し、障害のある方の絵を貸し出して、その貸出料を作品を作った障害のある方にお支払いするという、作品レンタルのサブスクの形で展開するまちじゅうアートという事業を実施している。なかなか借り手が増えないので、もっと宣伝していきたいということと、障害のある方の絵には素晴らしいものがあり、こちらのサイトで掲載している。このようなご覧いただく機会を設けることが大事であり展開しているが、一つ成果として、こちらをご覧になった県内の金融機関が、店舗で障害のある方の絵を飾るという展開をしていただいております、大変ありがたく思っている。このような様々な活動があるということを知っていただくことが大事であると感じている。

最後のシートは、活動指標・成果指標として、数値目標の進捗を一覧にしている。コロナ禍で数値としては沈んだが、だんだん回復し、現在は目標半ばである。今年は、東アジア文化都市が進むことにより、様々な事業が展開されるので、この数値についても更なる飛躍が期待できると考えている。

○横山会長 第 5 期の静岡県文化振興基本計画については、今進行中の東アジア文化都市 2023 静岡県という大きなうねりを受けながら進めているということでした。委員の皆様のお考えをお聴かせ下されば何よりである。

○遠山委員 今始まっていることの他に新しくやるのか、それとも、たくさんの中から、非常に特徴的なものを選んで重点化して、今後の静岡の特徴にしていくかがとても大事なかなと思う。大事なものは、五つぐらい要素があると思うが、一つは継続性、いろいろな事業の継続性があり、そこに行けば必ず何かをやっているという継続性があるかどうか。それからもう一つは地元性、地元が本当に盛り上がっているかどうか。更に言えば地域性、あるところだけがキラッと光るのではなくて、その地域の各所に広がりがある。そ

ういうプロジェクトは持続性があるのではないか。四つ目は企画性、同じことをずっとやっていくのか、それとも少しずつ進化させていくのかも、とても大事な要素ではないかと思う。そして、あと一つは魅力性。そこへ行って刺激を受けたり、いいなと感じるそういうプロジェクトであることが大事かなと。

この五つを全部満たすようなプロジェクトに力を入れていくのか、あるいはそのうちのいくつかで特徴があるようなものを作っていくのか。急に選ぶ必要はないと思うが、ちょっと特殊事情である今年が終わって、来年、基本計画が実際に動き始める。その時にそういった要素を考えた上で、何を特徴としていくかを考えていくのもいいのかなと思う。クレマチスの丘が今新しく話題になっているが、既にあるものを中心に強化し、そこに先ほどの五つの要素を反映させる。また、日本平の文化ゾーンを作るなど静岡を特徴付けるものをどうやって見つけていくかが、これからの課題だと思う。

○諸田委員 東京に住んでいると、東アジア文化都市ということ自体があまり話題にならない。こんなにいいことをやっているのに、もっともっと発信できないのか、全国的に発信したら、みんなもっともっと静岡に人が集まるのに、と感じた。

大事なものは、今年1年これをして終わりではないので、これをいかに活かして、全国的なものと呼び入れていくかということだと思う。

私は、別の文学賞の選考委員をやっている。学校の生徒を何人授賞式に呼ぶとか、新聞社がまとめてやったりとか、地元の企業も来てくれたりというところもあるが、そうでないところはどんどんつぶれていっている。企業とか、いろいろな熱気を巻き込んで、演劇でも文学でもどんどん広げて行かれたらいいなということ、すごく感じた。例えば静岡の文学賞として、他にもいろいろな地域もある。もっと若い人たちがどんどん飛び付くようなものも静岡でいっぱい出ていると思う。だから、古いものの良さを言うことと同時に、新しい人たちや、県外の人たちをどんどん引き込むということ、あえて出して行って、来年・再来年に続けていっていただきたいと思う。

○横山会長 確かに理事、課長の説明を聞いていると、大変めでたい空気が漂ったが、外から見てどうか。例えば今年の共催者となった東アジアの自治体がどのように今回の静岡県の催しを見ておられるのか。あるいは若い人たちが訪れてきてくれるのか。

○事務局 まさに東アジア文化都市で悩んでいるのが、発信である。働き掛けるところをしっかりとやらないといけない。この東アジア文化都市というのは、そもそもブランドで

ある。中身の一つひとつは素晴らしいイベントであり、そのイベントには行きたい人は集まる。ただ、その集合体である東アジア文化都市というブランドに人が集まるようにならないとやっている意味がない。

これからコア期間に至るにあたり、今月から高校生が韓国に行ったり。韓国のサッカーチームが静岡に来たり、ライブの国際交流がいよいよ始まる。中国もそろそろ動き始めており、まだ日本には来ないが、韓国に行くようになってきた。いよいよ年度の後半には国際交流も始まるということで、これから観光セクションや、スポーツセクションとしっかりと連携しながら、このブランドが付いているからすごいんだよと、いろいろ工夫していきたいと思っている。

○横山会長 国際的な広報をどのように展開するか。今、静岡県にあるものが東アジアの文化としても大切であるとの認識が増すように、価値をあらためて見だし、あるいは見直していくことが、大きな力になっていくと思う。

○鈴木委員 東アジア文化都市が普通ではないのは、1月から12月という1年間ということである。普通は4月から3月と予算に合わせてあるが、1月では予算がなくて出遅れているところが今回非常に大変だった。4月にやっと始まり、これから秋に掛けて、最後の12月が一番盛り上がるのではないかと思うが、それが残念であった。名前が浸透しなかったということもあり、4月、コロナ後、初めての茶会をしたが盛況で、東アジアのロゴを付けたということで、やっている人たちにもちょっと張り合いが出た。毎年茶会をやっていたが、コロナの間できなかったため、今回は頑張ろうという気持ちにもなった。そういう意味で、冠というのは大事だなと思った。

また、秋にもう1回、日中韓を頭に置いていろいろなことを工夫して茶会をしようという話がでた。そういう意味で、この後に残るようなことになったらいいと思う。もう半年を切っているが、今年1年いろいろなことがあったが、その中で何か残るかということを考えなければいけないと思う。

もっと大きな文化政策という意味で、静岡は横に長い県なので、東中西というバランスを考えなければいけない。中部が、かなり具体的に進んでいて、基盤もでき上がって来ていると思う。浜松は来年花博があり、それに向けて頑張ってくれると思うが、中部とは土壌が違うということも考えたこともあった。

今回、クレマチスの丘の話が出ており、私はこれを基盤とした、大きなゾーンとして、東部芸術公園という形で美術館も公園も全てを含んだ、東部をもっと活性化するための

拠点となるよう、10年ぐらいは掛かると思うが、考えていかなければいけないと思った。長泉町だけは発展するのは難しさがあると思う。今まで長泉町と連携していなかったことが一番大きなマイナス点だったと思う。地元が大事なので、長泉町ももっと頑張っ一緒にやっていくということから始めて、三島から沼津ももちろん、伊豆半島まで含めて東部として全体をもっと考えていかなければいけないと思う。

もう一つ、芸術祭も、障害者芸術祭と一緒にやろうということここ1~2年始めており、ネーミングを考えたいと思っている。障害者という言葉をやめ、みんなが一体となれるような、双方にメリットがある楽しい芸術祭にしたいということ、考えていかなければいけないと思う。私たちがこれでいいと思、一緒にやろうと言っても、その人たちにとって本当にいいのか、一緒になって考えていきたい。

○横山会長 今、この時代には、言葉の意味なり、言葉選びを改めて考え直す機会が増えている。誰とどう付き合うかという時に、昔ながらのラベルを貼ってひとまとまりにし、障害者という区別を立てた上で催しをしていたこれまでのやり方を変えて動き出していることについての発言だったと思う。いろいろなことが今見えてきており、伊豆文学祭についても発言があったが、文学活動というものは言葉そのものをどうするかという世界であることをあらためて表に出すなら、いわゆる文学好きの人たちだけじゃなく、もっと若い人がジャンルにこだわらずに、こんな話だったら聞きに行こうという流れが出てくるかもしれない。少しずつ考えを揺さぶられながら聞いていた。

○木下委員 現場にいと、ここ近年の急速な変化を感じており、一言で言えば、それは国への依存度がどんどん高まっていることである。

今回の東アジアの予算が純増されたというお話があったが、今年に関して言えばそれで加速されるというのは言うまでもないが、本当にそれで持続していくのだろうかという思いもある。大きな国策の中に静岡県も置かれていることは言うまでもない。

だから、ここでこれまでも議論してきたし、これからもここで検証していかないとけないのは、静岡県独自の事業をどこまでやっているのかということではないかと思う。美術館のあり方自体がここ近年急速に変わってきている。国際博物館会議、ICOMもずっとミュージアムの定義を改定しようとして去年ようやく改定されたのだが、これからのミュージアムは、私なりの言葉で言うと、他者理解の場だと思う。静岡県の美術館は1986年に開館し、開館展は東西の風景という特別展でスタートした。この東西というのは、東アジアと西洋という図式だったが、今から40年近く前の美術館とは、西洋世界を向い

ていたなと思う。極言すれば、西洋文化を県民に提供する場所としてスタートしたということは否めないと思う。それから37年が過ぎてみると、もはや美術館というのは、単に玄人、あるいは巨匠たちが作った芸術作品に触れる場ではなくて、多様な人間の作り出したものに触れる場であるというように大きく変わってきたなと思う。

そうした時に、この審議会でも申し上げてきたが、障害者の問題というのが非常に大きな課題としてあるのではないかと思う。他者とは、かつては西洋世界が他者の最たるものだったのが、その後の活動を通して、美術館の中に蓄積されてきたものは近世、江戸時代の絵画を中心としたコレクションであり、それは、過去の日本という明らかに他者である。それと向き合う場をここ数年の活動の中で提供してきたと思う。

健常者と他者としての障害者という、その区分け自体を見直して、文化活動の中に、あるいは文化行政の方向付けとしての文化政策の中に活かしていくことが強く求められている。この5期を進めながら、次にどこにこれを向けていくのか、次の展開をどうするのか、ということはこの場でいろいろ議論をすべきである。

国に振り回されてはいけないと思うが、しずおか遺産はどういうふうに進んできたかを、あまり知らないうちに制度としてスタートしてしまったと思う。今、3件認定しており、ビデオを見せていただいたが、従来の観光客誘致のビデオとどう違うのかという思いながら見ていた。これもある意味、国の方向性が非常に強くあり、世界遺産というものに準じて日本遺産というものを認定し、日本遺産に対してしずおか遺産という位置付けになるだろうと思うが、日本遺産という制度の検証とは十分に行われていないように思う。

日本遺産は最初に認定したものの見直しの時期に来ていて、文化庁が見直しをしているが、私は、最初からこの制度には、ストーリーを審査するというそのあり方に問題があったと思う。既にスタートしてきた様々な仕組み・制度の中で、検証の場はどこにあるのかということをよく考えないといけないなと思う。

事務局の話では、クレマチスの丘の話はいずれもっと大きく出てくるということだった。私も鈴木委員と共に問題点を整理する最初の委員会で、意見をまとめて報告書を出した立場だが、本当にこれは県の文化政策の新たな拠点と言うか、そのような方向で作っていくべきだと私も思っている。今まで民間がやってきた彫刻庭園美術館を違うものに変えていく必要がある。その方向性をどこで決めるのだろうかということである。うまく設計すれば静岡県の文化政策の重要な拠点になり得る、特に東部地区の拠点になり得る場所だと思うので、十分に検討して進めてほしい。文化政策審議会として、これは検討してもいいのではないかと思う。

○北川委員 文化政策としてはこういう形でやるしかないのかと思うが、いろいろな方が言われたことが共通の課題かと思っている。今、国が全体でやっていることは、観光文化による地域創生、もってインバウンドを図るということである。これは今から90年前に、日本が国立公園法を作った時の考えと全く同じで、インバウンドという言葉まで出てくるが、これと同じ方法を国は繰り返した。つまり、日本の国はこの40年間で教育程度も中以下、科学的競争力もほとんどなくなったという状態になっていて、結局、もともとあった地盤、あるいは基盤、あるいは土壌、そういう中でやってきたことしか頼るものはなくなったということを国が表明している。これは17年に文化芸術基本法に初めて書いたということを含めて、そういう方法でやっている。今、内閣府は、同じような視点で、観光に特化して国の政策を動かそうとしている。イベントとか芸術祭にはお金を出す、基本的に美術館・博物館に対してのインフラは極めて弱いのは同感で、全く変わっていない。そういう中で今までの通過点が基本法を変えていこうとして、いろいろな人たちがかわり、あるいは民主的であるということにおいてはいいと思っているが、結局、今やっている地域の独自性が一人よがりになっていて、国際性を持っていない。独自性が国際性を持たないと何の意味もないと思う。それは国内に限っていても、いろいろな人たちがそこに来て楽しむ、あるいは一緒にやるということがなくなってきたことになりがちであると、そんなふうに思っていた。

特に今回の東アジア文化都市に関しては、取って付けたように出てきて、資料に載っていることをやっているが、相当厳しいものがあると思う。僕は今まで文化都市に少し縁があるので言うと、新潟市、豊島区あるいは奈良があったが、それぞれがずっと今につながり、アジア、特に中国と韓国と継続していろいろな意味で交流をしたり、今までの歴史的な問題を検討したりということはやっていない。今回もそうなることだけはやめたいと思っており、本当の意味でアジアというものをどうつなげるかということをつなげていただかないと、今までの文化都市で名を上げたところと同じような形になると思っている。

国が文化インフラに関して基本的にお金を全く出していない中で国への依存度が高くなり、いろいろな場所で市民参加とかいろいろな言い方はしているが、それは国際性をほとんど持っていない市民参加であり、地域主義になっているということは反省しなければいけないと思っている。厳しい言い方になったが、そんなふうに思っている。地域プロデューサーという人たちを本当にちゃんと育てられるのか、あるいは一緒に議論して戦いながらやっていくしか僕は希望がないと思ってる。それを本当にやれるのかどうか

ということがあると思う。

最後に宮城さんがおられて、厳しい申し上げかたをするが、今、SPACはかなり頑張っているのはいいが、全体のこの間やってきたことを見ると、いろいろな動き方の中で、富士山とSPACしかないと僕には見える。非常に当たり前に民主的なことを言っているが、それでは駄目なのではないかと思っている。それに対してもちろんと検討した方がいいのではないか。それはSPACが頑張っていることは百も承知の上で、でも全体で出てくるとSPACが半分出てくる。この文化政策でいいのだろうかと思う。

○宮城委員 なぜ東アジア文化都市がいまだにブランドになっていないのかということだが、文化庁もそのことに問題意識を持って、リブランディングしたいという以上、静岡県レベルでないとリブランディングできないというぐらいの期待をしていると思う。中国・韓国において東アジア文化都市は、ブランドとして成立しているが、なぜ日本ではブランドとして成立していないのか。中国・韓国は軍事、政治、あるいは経済において極めて厳しい緊張関係の中にある。韓国はいまだに休戦状態であって、戦争が終わっていない。その軍事・政治・経済において極めて厳しい緊張関係の中、国際的にあって、文化が最後の砦として重要な回路になっているということは、国民的な認識になっているのだろうと感じる。

一方で日本はそれがない。だから、東アジア文化都市について、常に、関係の良くない中国や韓国となぜ今交流するんだみたいな話が出てくる。全く正反対であって、厳しい関係だからこそ文化という最後の砦が意味があるのだということである。このことが日本国内では案外ちゃんと発信されておらず、これまで9年間東アジア文化都市をやってきた都市もあまり発信しなかった。そこに東アジア文化都市のことを首都圏では全然聞かないなという本質があるような気がする。つまり、東アジア文化都市というのがどういう価値があるのかということが、そのものの価値が浸透していないから、ただ、イベントの集まりというふうにはしか見えない。イベントの集まりだったら、地域でやっていればいい、地域の人だけが関係があり、その翌年になると何の関係もなくなるのだと思う。

だから、東アジア文化都市というものの思想や価値を論壇の方にもっと語ってもらったり、東京の何かでシンポジウムをやったり、そういうことを発信してみたらどうかと思う。

○横山会長 ブランドとして確立化していないということについては、いろいろ見方もあ

ると思う。今出された数々の重いご指摘を反映させて今後の展開に奥行きを付けていくことは可能ではないかと思う。

○**太下委員** 東アジア文化都市はまだ残り半分あるので、その成果を見守っていかなければいけない。文化政策の観点から考えると、やはり今の時点からレガシーということを考えていく必要があるかなと思っている。静岡県の場合は、言うまでもなく、オリンピック文化プログラムを川勝知事が非常に積極的に推進し、そのレガシーとしてアーツカウンシルができて、非常に美しい形でここまで展開してきた。

では東アジア文化都市が終わった後どうするのか、という議論がすごく大事だと思う。その後、持続可能な形での文化観光であるとか、または食文化も含む文化産業の振興とか、または文化と福祉の接点の振興であるとか、そういったことを質的にも量的にも拡大していくということが非常に重要になってくると思う。静岡県は東中西に長いという話も出ていたが、アーツカウンシルも文化施設も県中部に集中しているということを考えると、東と西をどういうふうにしていくのか、今後のことを考えていくといいのではないか。

イベント事になってしまうが、2025年に大阪万博がある。主催の万博協会に4月に新しい部局として、地域連携局という部局ができた。関西だけじゃなく日本全国いろいろな地域と連携していく。イメージしているのは、主にインバウンドを想定しているが、例えば静岡県であれば静岡空港があるから、直接入国することができ、静岡で長期滞在して楽しんでいる中で、1泊ぐらい大阪に行くような形でプラスで万博に来てもらう。様々な地域と連携するためのツールとして地域パビリオンという概念を出してる。

この地域パビリオンは、もともとある地域の文化的な拠点を、万博の年だけ地域パビリオンと称することで、日本中が万博をやっているような祝祭感の演出ができるという構想であり、万博イヤーに全県で新しい文化拠点を拡充していくのだということを念頭に置きながら、東アジア文化都市のレガシーを考えていくというタイミングにいるのかなと思う。

○**横山会長** 民間事業助成を受ける数多くの事業があるかと思うが、それぞれもう一度検証して、東アジアの文化の交流にどのように役立つか、期待を投げ掛けてみるというのも一案かもしれない。

○**松井委員** 先日、静岡県の春の式典を拝見した。素晴らしく、日本の舞台も見たが、韓

国からいらした方々の舞台や、中国は映像で文化のことを映していたが、すごくそれが面白かった。東アジア文化都市は、結局、誰に向けているのかと思った。東アジアと言うからには、日本だけではなく、中国・韓国の方々もいらして楽しめるというようなことがもうちょっとあってもいいかと思った。もちろん静岡でお祭りがあり面白いイベントが盛りだくさんであれば、日本人としてすごく行きたいけれども、中国や韓国の方がいらした時に、中国の地元のお祭りがちょっとでも入っていたりとか、韓国のイベントが入っているとか、うちのイベントをやって面白いが、日本と比較するとこうなんだと、いろいろな発見があると思う。

なので、もっと中国や韓国の方を招致したイベントを作るとか、例えば大茶会も東アジアフェスみたいな感じでお茶会を中国と韓国と日本と三つ並べて、こんなに違いがあるんだとか、こんなにお茶の入れ方が違うんだみたいな発見があると、もっと国際的に楽しめることになるのではないかと思う。

もう一つ、私は静岡県森町出身で中学生の頃に、北海道の森町と姉妹都市でホームステイをさせていただいたことがあり、それでいろいろな発見があった。他には例えば海外に行って、たまたま出会った人と仲良くなって、実際のその人の家に行くというのは、一番手っ取り早くその人の文化とか、その国の文化、地域の文化がよく分かる。ホームステイは言語の問題があると思うが、中国の中学生でも小学生でもいいが、1週間ぐらい日本にホームステイして、日本のお祭りを楽しんでもらって、日本の学校にちょっと行って、日本人も中国に行ってホームステイするような、ホームステイをし合うというのは、すごく面白い国際交流になっていく。更にホームステイをすると、その人と本当につながり、それが持続する。また日本に来た時に連絡しよう、また会おう、またここに来よう、となってくると思う。持続することを考えるのであれば、密接な人、友達を作ることが、つながっていくのではないかと私は思う。

○横山会長 東アジア文化都市という催しがあって生まれてくるものは何か、それを検討していただければと思う。

○森谷委員 画業の傍ら、地域の活動として民間ユネスコの活動、静岡ユネスコ協会の副会長をさせていただいている。承認プログラムに登録し、ロゴを使わせていただいております。今回東アジア文化都市の5月の開会式で、知事が平和の砦という言葉は何度も繰り返し使っており、今日の動画にもあった。ユネスコ憲章の冒頭に、戦争が人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和の砦を作らなければな

らないというのが一番大事なメッセージであり、第2次世界大戦後どうしてこんなことになってしまったのかという反省で、一般的に平和というのは、国が作ってくれる、政治経済が作ってくれると思っているが、実は一人ひとりの文化の力とか、その方が強いという考え方であり、東アジアの文化都市の取り組みも、文化の役割は平和構築への揺るぎない手段であるということを発信していければいい。

今後の文化交流のことがあったが、高校生・中学生などの文化交流を盛んにしていくことが大事だと思っている。教育会議に私と宮城委員も出ているが、この間もそういう声があり、1校につき留学生1名を受け入れてやってみたいという声も出ていて、やはり文化というのは、ただの相手をするだけではなく平和構築であると、強いメッセージを込めたそうしたことができていけばいいかなと思っている。つまるところ、それしか世界の平和に強い威力を持つものはないのではないかな。

開会式で、韓国や中国の人たちとの交流で一番日本らしさを伝えるべき部分とは何かと思ったが、それは縄文由来の思想かと思う。縄文時代は大変高い文化で、戦争をしていなかった、自然との共存、この二つが江戸時代まではっきりと継続されてきた。これは、全世界に対してもっとアピールしたいことで、静岡県は富士山世界遺産を持っており、生きた縄文文化を持っている。SDGsの概念だと、持続可能な資源を供給するために環境を整えるということで、富士山世界遺産の考えでは、自然は神聖なるもの、神なるもの、尊いものなので、これを前面に出し、具体的には江戸時代までの文化財・景観というものを整えていくだけで、その強いアピールになっていくのではないかなと思う。遠山委員からも何かいいものをピックアップするという話があったが、しずおか遺産、14ページにある文化財保護活用、こういうところに力を入れていくことで、地域の人たちの心にも根付くものがあり、海外からもオツと思わせるものが再現していけるのではないかなと思う。

もう一つ教育に関して、日本から発する文化、自然とのかかわりで、人と人との平和的なかかわりが一番分かりやすいのは、茶道と武道だと思う。教育の会議でも、茶道と武道が大きく取り上げられていて、力を入れましょうということがあり、武道は必須で全員やり、茶道に関しては、必須ではないが、高等学校にはほぼ全ての高校に茶室があり、これを切り口にしてやっていくといいかなと思う。

子ども芸術大学の審査にもかかわらせていただいているが、伝統文化に応募が殺到していても、それが叶えられない、その場が足りないという印象がある。教育と文化政策を同じ方向に向かってもらおうと、なお勢いを増すかと思う。そのあたりを日本から世界に発信するポイントと思って考えている。

○柴田委員 静岡県は文化が豊かで、県民が生活の中で文化を楽しめる環境が充実してきていることにとっても感心し、日常生活の中で国際性のある作品とか、独創性のある作品、特色ある作品に県民がいつでも触れて体験できる、そういう機会があるということは素晴らしいと思って見ていた。

2点目だが、東アジア文化都市は、私も北九州市で総合プロデューサーとしてかかわらせていただいたが、広報にはかなり苦労した。東アジアという言葉が市民に伝えるのがとても難しかった。本事業は、日中韓を東アジア圏として捉えているが、日中韓の文化交流ですとお伝えすると、「ああ、分かりやすいですね。なぜ日中韓を使わないのですか」となる。なぜ東アジアなのかと。北九州市は東アジア文化都市を創造都市という概念で推進していたので、その説明に入っていくとさらに難しくなる。市民の皆さんにお伝えする時に、東アジアという概念を分かりやすく伝えるような言葉に変換しないと、なかなか浸透しないことを実感した。

レガシーとしては何が残るのかというと、最終的には人と人とのつながりである。東アジア文化都市のレガシーは、人に宿る。そのことを考えると三つある。まず、拠点の充実。近年活躍が目覚ましい SPAC。実は SPAC は、既に静岡県の SPAC ではなくて、我が国を代表する SPAC であり、それが静岡にあるということは素晴らしいことであるから、その拠点を充実させていく。次に、民間への様々な事業や技術の移転を図る。今まで県が主導でやってきたことを、持続させていくためには、民間のプロデューサーであったり、市民活動の核だったり、文化活動だったり、民間へ移転していくことが持続性を担保できることと思う。三つ目には、県下のネットワーク。2年ぐらい前の審議会で、たぶん遠山委員だったと思うが、1か所のところだけが栄えては何もならないと。点から面へ広がっていかないといけないということをおっしゃったことを記憶している。県下、県内外のネットワークというものを構築する。その三つが重要であると思う。

人材育成に力を入れる必要がある。SPAC が行っているシアタースクールは演技の技術だけを学ぶだけではなくて、宮城さんの哲学とか、思想とかを、演劇を作りながら子どもたちが吸収していく場が設けられているということ。これはすごく重要なことだと思っている。哲学なきリーダーというのは、短命で終わると確信しているので、宮城さんを主宰とした SPAC には相当期待している。

最後に成果指標について、数値のみが掲げられている。復調の傾向はあると思うが、ぜひ数値だけではなくて、定性的な指標を作ってほしい。例えば、東アジア文化都市が始まる前と後で、どのように地域コミュニティが変わったかとか、人材が変わったかとか、

そのことを指標として掲げていただき、測定していただけるとすごくありがたい。

○仲道委員 東アジア文化都市について3点ある。レガシーをどう考えるのかという時に、どれだけの人が集まり、どれだけの事業数があり、どれだけの経済効果があったかということ、過去最大にするというのも、ぜひ実現をしていただきたいが、定性評価と共に、なぜ人が集まったのか、なぜ経済効果が高く上がったのかという、方法論の部分もぜひ検証をいただきたい。それを今後の文化施策に生かしていくことも、レガシーの一つになるのではないかと思う。

もう1点は、東アジア文化都市の他の2つの都市について静岡県下の学校で子どもたちが学ぶ機会、例えば研究発表をすとか、そのようなことがあると、家庭内でも話題が出て、周りの大人たちも知り、そこから広がりが出るのではないか。より親しみを持って東アジア文化都市のことが周知されるのではないかと思う。

また、交流事業への助成が民間で上限50万円と資料で拝見したが、これは小さな規模への助成を考えていると思うが、交流事業をもっと応援できるような大きな仕組みをどう作るかを考えるのも良いのではないかと思った。

○澤田委員 皆様のご意見を聞いて刺激を受けている。静岡にこれだけの文化的な活動が既にあるということが非常に驚きであり、これは誇ってもいいのではないかと思う。そのベースの上に、たまたま東アジア文化都市があり、それを利用、活用して、今後も活きるようなものにするという考えの方がいいと思う。ちょうどいい機会なので、レガシーはやはり人だと思う。例えば、若い中学生・高校生、小学生の印象に残るようなことや、交流ができるかということに、重点を置いて、今までのやり方を踏襲するのではなくて、静岡メソッドみたいなものがあるような気がする。これが3年後、5年後に実を結ぶというような形にしていただければと思う。今までのやり方にあまり拘泥しないで、それを保ちつつも静岡らしい、いろいろなコンテンツがある県なので、国際交流もして、それらによりお子さんたちのいろいろなモチベーションを上げることが、それが本当の成果につながると思う。

東アジア文化都市は、結局、国際交流がテーマで、交流をいかにするかが大事だということを、どう具現化、具体化するかは、静岡県のお子さんたちが、全員でなくても、韓国・中国の人たちと行ったり来たり交流して、3日でも4日でも実際に経験することが重要ではないかと思う。

あとは、遠山委員がおっしゃっていたように、これからどこに重点を置くのか、静岡は

これだという山があるとしたら、何を大きな山にするのか。その下にどういう山々を置いて静岡県全体をアピールして行くかということだと思う。私も静岡生まれであるが、東京にいと、あまり静岡県というイメージにならない。伊豆もあり浜松もある、などとそれぞれ個性的なので、絞っていくことも一つの考え方ではあるが、それは事務局の方々にどういう形がよいかを検討してもらいながら皆さんと考えていければと思う。

○遠山委員 いろいろな議論があり、東アジア文化都市については600事業もいろいろやっているよということで終わってしまうのかなと思っていたが、まだ半年あるのであれば、国際交流という観点がないのは大問題である。いい意見がいっぱい出ているので、例えば、後半のお茶のイベントについては、3か国でそれぞれ競い合うとか、何らかの国際交流をやったという実績を一つ作っていただきたい。

○鈴木委員 中国のお茶の文化は茶礼というものがあり、韓国もやり方があって、それを展示を兼ねて組み合わせてやりたいということと、日本側では、日中韓を意識して、中国や韓国の焼き物を日本で使っている。中国からも、韓国からも影響を受けていて、どちらが先か分からないぐらいに一緒にやっていることを意識して考えましょう、というテーマでやるつもりである。

○横山会長 他者理解。その他者は人間だけではなく、山もあれば川もあれば鳥も虫もいる。今、単に人間だけでサステイナブルディベロップメントゴールズ、SDGsと言っているのは国連サミットという政治の場での合意点あって、人間の地球上でのポジションと言うか、どのあたりに位置を占めて、どういうふうに山川海と付き合っていくかということについては、それぞれの自治体や組織や個人がチャレンジできるわけである。文化という領域が、かつては社会の諸活動の周辺にあるかのように思われていたが、むしろ根幹をなすところであるとの考えが広まる時代が来ている。今日の集まりは、そのことを象徴する内容であったかとの感想を述べて結びとしたい。

4. 閉会

○事務局 貴重なご意見をいただき、御礼申し上げます。なお、8月で皆様の任期が終了するが、今後とも本県の文化振興にあたり、お力添えをいただきたくお願い申し上げます。以上をもって、本日の審議会を終了する。